



小学校での防災教育にも参加。市民の啓発活動も、地域の防災には欠かせない

世界の交通事故死者数の9割を開発途上国が占める現状を考えると、交通事故の救助訓練には大きな意味がある



高所からの救助活動は、都市化が進むほど重要になってくる分野だ

# 伝え続ける

# 救助のこころ

人命救助でものを言うのは体力や技術だけではない。  
安全管理に対する意識や、災害に打ち勝とうという強い意志、  
“救助精神”と言うべきものも重要だ。

大阪市消防局は各国の消防隊員を受け入れ、技術と共に救助のこころを伝えている。

[ 大阪府 ]

大阪市



大阪市

面積約225km<sup>2</sup>、人口約271万人の、日本有数の大都市。大阪市消防局には特別高度救助隊1隊のほか、航空隊と協力して山岳救助などに対応するAR隊、大規模災害などに対応するBR隊、生物テロや化学災害などに対応するCR隊、潜水による水難救助活動を行うDR隊などがあり、あらゆる災害に備えている。



大阪市消防局で3年ほど国際協力に携わってきた本土さん。今年の研修では、初めてコースリーダーを務めた



今年の研修には8カ国から計10人の研修員が参加した

大阪市消防局の本土淳一郎さんだ。日本の消防隊が育んできたこうした救助への思いを伝えることで、帰国した研修員を通して日本の救助精神が世界に広がるのが、研修の一つの目標となっている。  
とはいえ、日本式の救助文化は各国から集まる研修員に窮屈な印象を与えることが多いようだ。時間厳守や礼儀作法、最小限の休憩などの文化は、多くの研修員が慣れ親しんでいた自国文化とは異なる。安全管理、資器材の取り扱いや管理など、日本の救助隊では徹底していることも、研修員によってはあまりなじみがない様子が見て取れるという。大阪市消防局は研修員の気持ちや体調に配慮し、コミュニケーションを担当する研修監理員を立て、研修員が研修内容になじみやすいように丁寧にフォローしている。そうした努力のかいあって、研修を経て帰国する参加者に日本で学んでよかったことを尋ねると、多くが「救助精神」を挙げるといふ。

## 研修の「その後」を見守り 救助の輪を世界へ

大阪市消防局の活動は、研修員の受け入れにとどまらない。帰国研修員のフォローアップ研修にも参加し、これまでフィジー、フィリピン、ミャンマー、インドネシアの4カ国に足を運び、研修の成果がどのように生かされているかを確認してきた。また、救急救助技術研修をはじめとするJICA主催の消防関連の研修に参加しているウルグアイには、2010年に3人の研修講師を派遣し、現地での救助・救急救命チームの指導に対するアドバイスをを行った。「こうした取り組みを通して、各国の消防の体制や教育指導、資器材などの状況や現地でのニーズを確認し、研修内容に反映することを意識しています。実際に、各国で計画的かつ継続的に訓練を企画できる指導者の育成が課題となっていることが多かったため、研修項目に「訓練指導要領」を追加しました。この項目は参加者に好評で、今後は研修員が自分の国で活用したり、普及したりしてくれることを強く期待しています」と本土さんは話す。研修員自身が研修計画を立てて実際に指導方法を学ぶことで、指導者育成に対するイメージが生まれたようだ。未来を見据えた指導者育成の大切さは、大阪市消防局が積極的に伝えていきたい点だといふ。

「日本はこれまで、幾多の災害を経験し、そのたびにどうすれば被害を減らせたか、救えなかった命を救えたのかと反省を積み重ねてきました」と本土さんは振り返る。「課題を見つけ、訓練を繰り返して、教育指導を充実させることで日本の消防は高い技術を備えてきました。ただ、それだけ技術が向上しても、災害は常に私たちの予想を上回り、尊い命を奪うのです。災害に立ち

## 増え続ける災害 しわよせは社会の弱者に

気候変動などが原因で増え続ける自然災害と、社会の急激な発展によって生まれる都市災害。社会基盤が整っていない社会では、貧困層や子ども、老人などの社会的弱者がその影響を最も強く受ける。多様化、深刻化する災害に立ち向かい、被災者を救助する人材の育成は、世界的に差し迫った課題だ。そこで立ち上がったのが、日本の消防隊だ。JICAが1987年に始めた救急救助技術研修では、これまで29年間で67カ国から延べ265人の研修員を受け入れてきた。主に各国の消防学校で救急救助技術を教える人々を対象に、災害大国・日本が積み上げてきた経験と知識を伝えている。

東京消防庁に次いで、日本を代表する規模を誇る大阪市消防局は、JICA関西と共に1998年からこの研修を担当している。95年の阪神・淡路大震災では、被災者の救援に奔走した大阪市消防局。伝えるのは知識や技術だけではなく、経験に基づく救助の精神だ。「人命救助で大切なのは、救助精神、資器材愛護、安全管理意識」の三つです。仲間を思いやる心、被災者の心に寄り添うこと、資器材を大切にすること、安全管理を徹底すること、最後まであきらめずにやり遂げること——こうした、救助の基本となる心掛けを、研修カリキュラムの中で一貫して伝えています。そう話してくれたのは、



フィジーで行われたフォローアップ研修。継続的な協力が、救助技術の向上とともに世界との絆を強める

向かうため、消防は時代の変化を敏感に受け止め、進歩していくと同時に、救助に不可欠な精神を傳承していく必要があります。私たちは、各国の研修員が求める技術と共に、救助の精神も伝えていきたいと思えます」  
長年続く研修の一つの成果といえるのが、2003年のアルジェリア地震で生まれたエピソードだ。5月21日、アルジェリア北部で発生したマグニチュード6.7の地震では、約2300人が亡くなった。このとき、日本の国際緊急援助隊が救援活動に駆け付けた現場に、大阪市で研修を受けたトルコの救助隊員が居合わせたのだ。日本とトルコの救助隊は力を合わせて救助活動に当たり、がれきとなったホテルの中から生存者を救出することができた。研修員の輪を世界に広げ、こうした連携の可能性をさらに高めていくことが、大阪市消防局の願いだ。